

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 教務委員会 および 星薬科大学FD委員会

(責任者名) 東 伸昭 / 阿川 敏恵

(役職名) 教務部長 / FD委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムの履修内容は、薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂)を踏まえ、生成AIを含むAI技術の活用や倫理的配慮、データサイエンスの応用的内容を段階的に取り入れており、数理・データサイエンス・AI教育(応用基礎レベル)の要件を満たしている。</p> <p>本プログラムでは、基礎的な知識の修得に加え、統計解析やプログラミング、研究実習等を通じて、データを課題解決に活用する実践的能力の育成を図っている。プログラム構成科目には必修科目と選択科目が含まれるが、基盤となる科目および実践的な研究科目を必修として配置していることから、多くの学生が体系的に履修する構造となっている。</p> <p>本プログラムに関する履修・修得状況に関する具体的な点検・評価は、教育改革を推進するFD委員会において実施している。R6年度までのプログラムにおいては全ての科目が必修であったため単位取得状況のみを評価してきたが、R7年度以降のプログラムには選択科目が含まれるため、履修状況(履修率)についても評価している。</p>
学修成果	<p>本学ではすべての授業科目に対して、学期終了時に「授業評価アンケート」を実施しており、受講生からの講義に対する評価を教員にフィードバックすることで、学生の学修成果把握と、今後の教育内容の改善を行っている。</p>
学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度	<p>上記「学修成果」の項目に記載したアンケート内に学習の理解度を問う項目が存在し、この項目の数値と自由記述によって学生の理解度を把握している。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等 他の学生への推奨度	<p>現在実施している「授業評価アンケート」では、当該科目を後輩に薦めるかどうかといった項目を置いていない。しかし、本プログラムを構成する科目についてシラバス等で周知するため、後輩等他の学生への推奨度を調査する必要性は低いと考える。</p>
全学的な履修者数、履修率向上 に向けた計画の達成・進捗状況	<p>基盤となる科目および実践的な研究科目については必修科目として配置していることから、多くの学生が段階的に履修する体制が整備されている。特に、研究実習を通じた実践的な学修については、薬学科および創薬科学科の双方において履修機会が確保されており、安定した履修状況となっている。</p> <p>一方で、一部の選択科目(実践統計学)については履修者数にばらつきが見られることから、履修ガイダンスにおける周知や履修モデルの明示、研究活動との関連付けを強化するなど、履修率向上に向けた取組が必要である。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラム開始は令和7年度であり、卒業生が社会に出るのは令和11年度以降となる。現時点ですでに卒業調査の実施がされており、可能な範囲で活躍状況等の調査を実施する予定である。また、キャリア教育等で企業の担当者と接する機会があるので、その際に卒業生の評価を訊ねたい。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムの科目「データサイエンスの理解と応用」の中で行うオープンイノベーション研究会においては、キャリア教育を通して産業界との交流が行われており、今後、意見を求める機会を設けたいと考えている。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	統計解析やプログラミング演習、研究実習等を通じて、データを活用して課題を解決する体験的な学修機会を提供することで、「学ぶ楽しさ」および「学びが社会や実務にどのように活かされるか」を実感できるよう工夫している。 また、生成AI等の最新技術の活用を取り入れ、学生自身が試行錯誤しながら学修を進めることで、主体的な学びを促進している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	授業においては、データサイエンスやAIに関する概念を具体的な事例や演習を通じて説明することで、抽象的な内容を理解しやすくする工夫を行っている。特に、統計解析やプログラミング演習では、段階的に課題を設定し、基礎から応用へと無理なく理解を深められるよう設計している。 また、授業ごとのアンケートや学生からの質問内容を踏まえ、理解が不十分な点については次回以降の授業で補足説明を行うなど、継続的な改善を行っている。これらの結果については教務委員会およびFD委員会において共有し、授業改善に活用している。 さらに、生成AIをはじめとする技術の進展や社会の変化を踏まえ、教育内容や教材の見直しを適宜行い、最新の知見や活用事例を授業に反映している。加えて、生成AI等のツールを活用した学修支援により、学生が自ら試行錯誤しながら理解を深められる環境を整備している。